歌川国芳　略年譜

1790年代　寛政

1歳　11月15日　江戸日本橋本銀町一丁目に生まれる。家業は染物屋（紺屋）。

- 蔦屋重三郎、没。歌川広重、生まれる。

1800年代　享和

6歳　この頃、北尾重政の『絵本武者鞋』や北尾政美の『諸職画鑑』を見て人物を描いたという。（三囲神社の碑文に記載）

- 十返舎一九『道中膝栗毛』初編刊。

1810年代　文化

12歳　鍾馗の図を描いて歌川豊国に認められ弟子になったという。（三囲神社の碑文に記載）

15歳　この頃　歌川豊国の門に入ったという説あり。兄弟子の国直宅に寄宿したという。

17歳　この頃刊行と思われる戯作者・浮世絵師の相撲見立番付で、国芳前頭二十七枚目。

- 曲亭馬琴『南総里見八犬伝』肇輯刊。
- 葛飾北斎『北斎漫画』初編刊。
- 鳥居清長、没。

20歳　「採芳舎」の号を使用する。

22歳　深川にいたか。

23歳　「一勇斎」の号を使用するか。

1820年代

25歳　この頃、狂歌師の梅屋鶴子（鶴寿）と知り合うか。

29歳　すでに向島にいたか。

- 曲亭馬琴『傾城水滸伝』初編刊。
- 歌川豊国、没。

1830年代　文政

31歳　この頃、《通俗水滸伝豪傑百八人之一個（一人）》刊行が始まる。

- 柳亭種彦（歌川国貞画）《偐紫田舎源氏》初編刊。
- この頃、葛飾北斎《富嶽三十六景》刊行。

36歳　この頃、西洋画風の名所絵を描く。

37歳　この頃、国芳の水滸伝武者絵の流行により、彫物（刺青）が流行する。

- この頃、歌川広重《東海道五拾三次之内》刊行。

1840年代　天保

40歳　この頃から、「朝桜楼」の号を使用するか。

41歳　斎藤せゐと結婚。12月には向島に居住。

- 河鍋暁斎、7歳で国芳に入門するが、まもなく去る。

43歳　長女とり、生まれる。

44歳　11月、中村座顔見世狂言『優平家劇場軍配』で三代目関三十郎が浮世絵師歌川国芳の役で出演。

46歳　次女よし、生まれる。

47歳　《源頼光公館土蜘作妖怪図》（No.89）が天保の改革を風刺とみなされるも咎めなし。

48歳　この頃から、「芳桐印」を使用する。

- 天保の改革はじまる。
- 6月、役者、遊女、芸者の絵の出版禁止。絵草子などの出版統制。錦絵は一枚16文、続絵は三枚まで。柳亭種彦、没。

弘化

49歳　高砂町又兵衛店に居住。

1850年代　嘉永

54歳　この頃、新和泉町又兵衛店に居住。《きたいなめい医難病療治》（No.217）が風刺とみなされ、奉行所で取り調べを受け、始末書を提出。

- 溪斎英泉、没。
- 曲亭馬琴、没。
- 葛飾北斎、没。
- 芳幾、国芳に入門。

57歳　新和泉町南側、俗称・玄冶店に居住。6月、梅屋鶴子（鶴寿）の書画会の席上、九紋龍史進を畳30畳敷きに描く。《浮世又平名画奇特》（No.218）が風刺とみなされ咎められる。

- 芳年、国芳に入門。

59歳　浅草寺に「一ツ家」の絵額を奉納。秋、中風で倒れる。

60歳　妻せゐ、没。

1860年代　安政

62歳　摺物の評判記「三幅対衞占語葉」に「病気　一勇斎国芳」とある。

1860年代　万延

65歳　3月5日（4日とも）、玄冶店の自宅にて没。墓所は、浅草八軒寺町の日蓮宗大仙寺（現在は小平市に移転）。

1860年代　文久